

令和 4 年 6 月 23 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02499

研究課題名(和文) 初期近代英国演劇におけるキルケ神話の表象に関する考察

研究課題名(英文) Representations of Circe Myth in Early Modern English Drama

研究代表者

廣田 篤彦(Hirota, Atsuhiko)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：40292718

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は古典神話に起源を持つキルケ的な誘惑者の初期近代英国演劇における表象の諸相をJohn Fletcherの戯曲に焦点を当て、同時代の他の劇作家との比較において考察するものである。本研究を通じてヨーロッパ人キリスト教徒の世界的な活動範囲の拡大を背景としたキルケ的劇中人物の、特に周縁的な各地における遍在を確認し、更に誘惑者・被誘惑者、変身させる者・させられる者の逆転現象が起きている様相をテキストの精読と、同時代の宗教、経済、政治的な文脈との関連において分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は以下の3点と考えられる。1)初期近代英文学の研究において、特に日本においては手薄であったシェイクスピア以外の劇作家に焦点を当てシェイクスピアとの比較における検討を行ったこと。2)古典古代神話に由来する誘惑者像の展開を考察することで比較文学的な研究を試みたこと。この点については、古代から現代に至るより長い時間軸におけるさらなる研究の可能性が見いだされた。3)欧州、キリスト教の世界的な拡大という文脈に着目した研究であったこと。この点は、今日のグローバル化における文化、社会のあり方の検討とも通じる社会的な意義を有している。

研究成果の概要(英文)：This research project, aiming at analysing the dramatical representations of Circean enchantress in early modern England, focused on John Fletcher's works (particularly, *The Tamer Tamed*, *Bonduca*, *The Knight of Malta*, and *The Island Princess*) and examined them in comparison with other contemporary playwrights, including William Shakspeare, Christopher Marlowe, and Philip Massinger. Through research, the aspects of ominipresence of this figure in the age of European and Christian expansion over the globe -- especially in the various peripheries -- is explored, and the reversal of the enchanter/enchanted, transformer/transformed binaries is closely studied in the contemporary religious, economic and political contexts.

研究分野：英文学

キーワード：初期近代 戯曲 キルケ 古典神話 英文学

1. 研究開始当初の背景

本研究は研究代表者が以前の科学研究費補助金により実施してきたシェイクスピア演劇と古典古代の神話・伝説との間テクスト性に関する研究をさらに発展させるものとして開始された。研究開始時までに研究代表者は、古典古代の神話、伝説、文学に登場する魔女像に着目し、シェイクスピアがこれをどのように戯曲作品の中で書き換えているかの分析を行い、以下に関する研究成果を発表していた。1)『ヴェニスの商人』におけるメディア像を含む黄金の羊毛伝説と聖書の交差的使用、2)歴史劇、『トロイラスとクレシダ』、『オセロー』、『アントニーとクレオパトラ』におけるキルケ像の継続的な書き換え。また、同時にフランス Paul Valéry 大学に設置されている L' Institut de Recherche sur la Renaissance, l' âge Classique et la Lumière (IRCL) の研究プロジェクトに参加することで、ルネサンス期イタリアで書かれたキルケに関する文献の初期近代英国における翻訳の編集を進めていた。

2. 研究の目的

研究代表者による上記先行研究とその成果を基盤として、初期近代英国における古典古代の神話・伝説の受容と変容の諸相を分析することを目的とした。そのため、シェイクスピアと比較しうる同時代の劇作家におけるこの問題を中心的な研究対象として取り上げた。さらに、初期近代英国における受容と変容を、古代から現代に至る長い時間軸において、英国同様に古代ギリシア、ローマ文化の影響を強く受けたヨーロッパ諸文学の文脈に位置付けることで、その特徴を一層明確な形で解明することを目指した。

3. 研究の方法

シェイクスピアと比較して検討する初期近代英国の劇作家としてジョン・フレッチャーを中心に据えた。フレッチャーは国王一座におけるシェイクスピア後の主要な座付作者であり、また、両者が共作した『ヘンリー八世』に関する考察を研究代表者が既に行っていたことから選定された。フレッチャーの戯曲の内、キルケ神話との関係が想定されるものを、過去に実施したシェイクスピアに関する研究と平行する形で設定された空間軸(ロンドン、歴史上のイングランド、地中海、非欧州世界)に沿って分析を進めた。この際、クリストファー・マーロウ、フィリップ・マッシンジャーといった作家の戯曲をも比較検討の対象に含めることとなった。理論面では翻訳・翻案論、間テクスト性、神話研究の成果を活用した。さらに、こうして初期近代英国の戯曲の研究を進める傍ら、特に研究の後期にはそれに留まらない多様な時代、言語、ジャンルのヨーロッパ文学作品群における古典古代神話・伝説の書き換えの検討を行い、研究のさらなる発展の可能性を探究した。

4. 研究成果

本研究課題による研究成果は以下の3つに集約できる。1) 2) はフレッチャーとの比較において検討したシェイクスピア作品を主として扱っており、3) が本研究の中心に設定したフレッチャーの戯曲に焦点を当てたものとなっている。

1) フォールスタッフの行動圏

本研究ではフォールスタッフが登場する複数の劇中で行動する場所の検討を通じてこの人物が造型されてきた痕跡をエリザベス朝の歴史記述、歴史劇(特に *The Famous Victories of Henry V*, *Sir John Old Castle*) との比較の中で指摘し、さらにそこに見られる特性を考察した。これは、研究期間の前半に焦点を当てたフレッチャーの *Bonduca* に顕著に見られるキルケの劇中人物の居住域としてのグレート・ブリテン島に関する考察から発展したものであり、やはりキルケ的特性を示すフォールスタッフの活動域をこの問題意識において分析したものとなっている。

『ヘンリー四世・第一部』で彼は初め2幕におけるイングランド南東部から第3幕でウェールズとの境界地方にあるシュルーズベリーへ移動し、ここで劇の終幕を迎えるが、その移動の様子が具体的に描写されている点を特に詳細に検討した。『第二部』での主戦場は北部に設定されているものの、やはり西部地方におけるフォールスタッフの行動が語られる。こうした西部、特にウェールズとの境界地方への指向はこの登場人物の原型の一つであるオールドカッスル卿との関係を示唆している。

舞台がウィンザーから動かない『ウィンザーの陽気な女房達』でも、『第二部』で描かれたグロスターシャーとの関係が引き続き言及され、この地方とのつながりが意識されると共に、『第一部』で強調されるセヴァーン川と比較できるかのように、ウィンザーがその河畔に存在するテムズ川が重要な役割を果たしている。さらにこの町の宮廷と町衆の社会との境界性がウェールズとの境界地方と比較しうるものとなっている。さらに、『ヘンリー五世』におけるフォールス

タッフへの言及においても川が問題となり、これを死後に ‘Arthur’s bosom’ に抱かれているという台詞と併せて検討することによって、この登場人物が上記戯曲から一貫してウェールズ、また、境界地方への関係を有していることが確認できる。

(本研究成果は、第2回英国史劇研究会 2022年3月12日における講演の形で公表している。この研究会は、科学研究機補助金 基盤研究(B)(一般) 課題番号 21H00511 「エリザベス朝英国史劇における民衆のイングランド王国表象」によるものである。)

2) Falstaff in the Thames: English Witchcraft and Biblical Exorcism in *The Merry Wives of Windsor*

Like 1) above, this study derives from the exploration of Great Britain as a habitat of Circean figures, among which I contend is Falstaff, and is part of the project to examine the overcrossing of classical (Circean) and biblical undertexts in early modern literature.

The Merry Wives of Windsor is no doubt the most English among Shakespeare’s comedies. It is located the iconic Windsor and its neighbourhood, and while a Frenchman and a Welshman appear, the main characters are predominantly English. The main plot of the play, the punishment of Falstaff’s lechery by the wives, has been argued to show connections with indigenous English traditions of public punishment and humiliations. In addition, the final baiting of the knight with stag’s horns by the children of Windsor is contrived with reference to the local legend of Herne the gamekeeper and the folk tales of fairies. This trick is also based on the Ovidian tale of Actaeon, thus blending the indigenous and classical elements. Besides this, there are numbers of references to the classical tales and characters scattered throughout the play. Likewise, biblical references abound this play. Although, as Hannibal Hamlin observes, Falstaff may not be a master of biblical allusions as in the Henry IV plays, we still find allusions and references to the Bible in *The Merry Wives of Windsor*. In this article I argue that the blending of various cultural traditions is not exclusively seen in the final punishment but also in the previous rounds. Especially, the earlier rounds of throwing Falstaff into the Thames together with dirty linens and transforming him into the witch of Brentford reveal the three-fold mixture of the indigenous-classical-biblical elements. As a subtext of the first, an episode of the humiliation of Virgil the poet has been observed. I argue that on it is overlaid a biblical episode of Christ exorcising the demons into the Gadarene swine described in three Gospels, Shakespeare’s familiarity with which is testified by Shylock’s words to Bassanio in *The Merchant of Venice*, ‘Yes - to smell pork, to eat of the habitation which your prophet the Nazarite conjured the devil into?’ (1.3.28-29).

(本研究成果は2022年10月1-14日のPaul Valéry大学への招聘期間に講義、また講演として公表の予定。)

3) Transformers Transformed: The Fluidity of Circean Identity in *The Island Princess*

This article focuses on the theme of unstable identity of Circean enchanters seen commonly in John Fletcher’s *The Tamer Tamed* (1609/10) and *The Island Princess* (1621), and Philip Massinger’s *The Renegado* (1623/4). All these plays represent the floating mutability of the enchanting/enchanted, transformer/transformed, converter/converted binaries, particularly expressed in the highly commodified (as well as sexualised) vocabulary. Here I particularly examine it in detail in the 1621 play of Fletcher in comparison with others, and in the context particular in this play.

The instability of the enchanter/enchanted binary is already inherent in the Odyssean episode of Circe. There, Circe the sorceress falls in love with Odysseus after failing to transform him. The two plays of early 1620s, written in a short interval and performed by rival companies, pursue this fluidity in exotic settings of the East and the Mediterranean (‘peripheries’ in the early modern English imagination), introducing the encounters of ‘foreign’ and Muslim female enchantresses and the European and Christian male ‘conquerors’. The victories of the latter after overcoming complications including the threat of death confirm the superiority of the European, Christian, and male subject - together with the victory of virtue - in the framework of tragicomedy, but we might also discuss that the instability of the enchanter/enchanted, transformer/transformed, converter/converted, tamer/tamed binaries leave tragic potential.

(上記2同様、本研究成果は2022年10月1-14日のPaul Valéry大学への招聘期間に講義、また講演として公表の予定。)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Atsuhiko Hirota	4. 巻 26
2. 論文標題 Hybrids and Bastards: The Erosion of Trojan and Greek Identities in Troilus and Cressida	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Journal of Classic and English Renaissance Literature	6. 最初と最後の頁 5-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 廣田篤彦	4. 巻 4
2. 論文標題 『ハムレット』のヘキュバ “The mobled / inobled queen”	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Shakespeare Journal	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 廣田篤彦
2. 発表標題 フォールスタッフの活動域
3. 学会等名 英国史学研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Atsuhiko Hirota
2. 発表標題 Circean Wives and Blending of Myths in The Merry Wives of Windsor
3. 学会等名 The Classical and Renaissance Association of Korea（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 アン・ブレア、住本規子、廣田篤彦、正岡和恵	4. 発行年 2018年
2. 出版社 中央公論新社	5. 総ページ数 448
3. 書名 情報爆発	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
フランス	Paul Valery大学ICRL		